

High Prevalence of Cam Deformity in Dysplastic Hips: A Three-Dimensional CT Study

河野, 裕介

<https://hdl.handle.net/2324/1806883>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名： 河野 裕介

論 文 名： High Prevalence of Cam Deformity in Dysplastic Hips: A Three-Dimensional CT Study

(発育性股関節形成不全における大腿骨骨頭頸部移行部の3次元的形態評価)

区 分： 甲

論 文 内 容 の 要 旨

大腿骨頸部に cam 変形が存在すると、骨盤骨切り術後に二次性の大腿骨寛骨臼衝突現象（インピンジメント；FAI）を引き起こす可能性がある。しかしながら、発育性股関節形成不全（DDH）固有の骨形態や、変形性関節症（OA）により修飾される形態変化はこれまで明らかにされていない。我々は、正常股、DDHによる前・初期 OA 股、および進行期 OA 股において、三次元的な骨頭・頸部移行部の形態比較を行った。

DDH68 関節（そのうち、前・初期 OA 50 関節、進行期 OA 18 関節）、正常股 24 関節の CT 画像を用いて、 α 角、骨頭・頸部移行部オフセット比（HNOR）を大腿骨頸部全周性に計測した。計測位置は時計表記で表した（上方 12 時、前方 3 時）。

前・初期 OA 群の α 角は頸部の前上方、下方（1～2 時、5～7 時）で正常群と比較して有意に大きく、HNOR は前上方（2 時）で有意に小さかった。進行期 OA 群の α 角は前方（1～4 時）で前・初期 OA 群と比較して有意に大きかった。DDH において、各症例の最大 α 角は前上方 2 時の位置に最も高頻度に認めた（60%、41/68 関節）。cam 変形（最大 α 角 55° 以上）の頻度は正常群 4.2%（1/24 関節）、前・初期 OA 群 22%（11/50 関節）、進行期 OA 群 50%（9/18 関節）であった。

変性のほとんどない前・初期 OA 群の cam 変形は DDH 固有の形態と考えられ、正常群より高頻度に認めた。進行期 OA 群における高頻度の cam 変形は OA で修飾された変形と考えられた。骨盤骨切り術を行う際、進行期 OA の症例に行う場合には特に、二次性 FAI を防ぐために骨頭・頸部移行部の術前画像評価が望まれる。